

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

データベース「朝枝利男コレクション」の特徴と残された課題<基幹研究：民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築：オセアニア資料を中心に>

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード: 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009584">https://doi.org/10.15021/00009584</a>

# データベース「朝枝利男コレクション」の特徴と残された課題

文 丹羽 典生

データベース「朝枝利男コレクション」は、朝枝利男が生涯に残した写真をもとにしている。朝枝利男とは、戦前にアメリカで活躍した人物である。博物学に関係する専門知識や技術に造詣が深いカメラマンや学芸員として、1930年代に太平洋島嶼部、アメリカ大陸の太平洋沿岸に派遣されたさまざまな探検隊に参加していた。国立民族学博物館には、彼の遺族から寄贈された関連資料がある。そのなかには、朝枝の日記4冊、16冊のアルバム、136枚の水彩画やスケッチのほか、写真、映像フィルムなど多様な資料が含まれている。このデータベースは、この収蔵資料のなかから探検のさなかに撮影された写真と、彼がそれらの写真を選別して自作したアルバムから構築されたものである。

朝枝は、1930年代の太平洋島嶼部にかなり幅ひろく足を運んでいる。画家ゴーギャンのいたタヒチ、小説家メルヴィルが『タイピー』の舞台としたマルケサス、バウンティ号の叛乱を指揮したフレッチャー・クリスチャンの隠棲したピトケアン、灯台守として離島に暮らすインド人の家族がいたフィジー、南洋に進出し現地に根付く日本人と出会ったサモア、そして進化論の代名詞ガラパゴス諸島。ガラパゴス諸島へは、1932年と1935年の2回訪問している。日本人の研究調査としては最初期のものである。

実際のところ朝枝が撮影した写真は、撮影者名が明記されていないことも多いが、公刊された研究書や一般書のなかでひろく使われている。彼がおもな活動の舞台としたアメリカはもとより、日本においても、ミステリー雑誌として有名な『新青年』や科学啓蒙誌の『科学画報』などにおいて彼の写真が使われていたことが確認できている。博物館の収蔵資料としても、イギリスのケンブリッジ大学考古学人類学博物館、フランスのケ・ブランリー博物館、アメリカのカリフォルニア科学アカデミーやピショップ博物館、そしておそらく（というのは新型コロナウイルス感染症の流行で確認する機会を逸したので断言できないため）アメリカ自然史博物館など世界各地の博物館に散在している。

## 写真撮影者としての朝枝利男の視点

民博の朝枝利男コレクションのデータベースは、朝枝が撮影・現像し、個人的に所蔵していた写真から構築されている。もともとなる情報が個人資料をベースとしているため、本データベースにも朝枝個人の視点がでている点に特色があるとい

える。じつのところ朝枝は少なくとも8回探検に参加している。ところがすべての探検が十分な記録を残しているわけではない。公的な博物館と共同で行われたものではありながらも、半ばパトロンによる私的な探検という性質を備えていたからであろう。そのため探検の名称・期間・訪問先の情報が整理されているとはいいがたい。データベースにはそのあたりの情報を加えることで、掲載されている写真が、いつ、どこで何の探検において撮影されたか明確にわかるようにしてある。あたりまえのことのようだが、これらの点が整備されたデータベースは本館のものだけである。なお、こうした基礎情報を確定した資料的根拠を提示するための論考も作成したので、関心のある方はご参照いただきたい（丹羽 2020）。

また朝枝個人の来歴についても知られることは少なかった。本館のビデオテークや他館の資料インデックスのなかなどに略歴はあるが、データベースに載せた年譜はそれらと比べてももっとも詳細なものである。年譜の項目を作成するにあたっては、背景資料を精査して選別した。作成を通じてほかでは知られていない興味深い事実がいろいろ発掘できたので、将来的には、彼の小伝を執筆することも考えている。

もう1点、データベースの特徴として指摘しておきたいのは、朝枝自作のアルバムに付された情報を盛り込んであることである。写真とあわせて撮影者自身が付したコメントを読むことで、画像情報を深く読み込む際の大きな助力となることはまちがいない。なおデータベースにこれらの情報の掲載



ガラパゴス諸島でパイプをくわえる朝枝利男（データ番号 X0076115、1932年、フロレアナ島、撮影者不詳）。



ソロモン諸島での伝統的な舞踏の記録（データ番号 X0079450、1933年、サンタ・カタリナ島、朝枝利男撮影）。

が可能になったのは、筆者が担当したフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトだけの成果というわけではない。本館には朝枝の業績を紹介するビデオテークが館内限定で公開されている。幸いなことに、ビデオテークを作成する際に作られたと思われるエクセルが残されており、それらを活用できたからである。このような先行するプロジェクトの成果に多大なる恩恵を受けていることは強調しておきたい。

## 尽きない残された課題

最後に残された課題について触れたい。現在データベース上に公開されているのは、おもに太平洋島嶼部関係の写真である。本稿執筆の時点では、アメリカ大陸太平洋沿岸において撮影された写真のデータが公開できていない。しかし基礎データの整理はおおむね済んでいるため、早ければ今年度中にデータベースに追加することができる。これらは、アメリカ自然史博物館や博物学者ウィリアム・ビーブと関わる写真で、深海生物から当時の博物学調査の様子まで瞥見できる写真群である。

それ以外で、将来的に可能であればデータベースとしてさらに追加したいものは、朝枝が作成した一連の水彩画だ。水彩画は大きく2種類にわけられる。1つが魚類の水彩画である。朝枝の探検隊のメンバーとしての業務は、写真撮影と水彩画の製作が2つの大きな柱であった。採取直後の色彩を記録する技術として、また展示場における解説資料として、水彩画は作成されていた。カリフォルニア科学アカデミーには、彼が1932年のガラパゴス諸島へ探検した際、及び1935年にソロモン諸島に探検した際の魚類の水彩画が大量に収蔵されている。絵の背面には魚が採集された年月日と場所が、明記されている。本館にも、魚の水彩画51枚が残されている。これらは標本画のように単体で真横から描かれたものではなく、背景に生息環境も描き込まれていることから、展示のために作成されたものと推測できる。

もう1種類の水彩画は、収容所の風景が描き込まれている。

## 丹羽 典生（にわ のりお）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は、オセアニアの社会人類学、応援の比較研究。論文に「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察—朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4): 625-682 (2020年)、著書に『宗教と開発の人類学—グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』（石森大知共編 春風社 2019年）。



サモアでのカヴァ儀礼。右端は探検隊のメンバーで朝枝の友人のサモア人ペイ（データ番号 X0078400、1936年、バゴバゴ、朝枝利男撮影）。

朝枝は日系人として第二次世界大戦中にアメリカの収容所での生活を余儀なくされている。朝枝夫妻は、最初がカリフォルニア州タンフォラン、ついでユタ州トパーズの収容所にてあわせて4年間ほど生活している。その期間に描き溜めた水彩画が、本館には58枚ある。色彩や形態の細部まで注意深く描き込まれた魚類のそれとはことなり、おそらく朝枝が体験した風景が直截に描き出されている。魚類の標本画作成時のならい癖か、いずれの絵画にも裏面には、製作された年月日と場所が明記されているのが興味深い。朝枝はこれらの水彩画を友人に寄贈していた節があるが、彼の私的経験というだけでなく日系人の当時の体験を当事者の視点から垣間みるための貴重な資料ともなるだろう。

このように残された課題は多い。データベース自体にも課題が多いことは上述したが、いずれにせよデータベースの作成というのは研究としては1つの過程に過ぎない。今後は、写真資料を精査するなかからみえてきたことを論考としてまとめるだけでなく、水彩画資料などは海外の博物館と協働しつつ画集にすることなどを検討している。

## 引用文献

丹羽典生 2020「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察—朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4): 625-682。